

「モンゴル草原奇譚」島村一平（国立民族学博物館准教授）

(1) 呪術師に弟子入り ㊤ 2021年1月9日刊行

真っ赤に焼いた鉄を舐めながら治療をする呪術師が西の辺境にいる。そんな話を聞き、いてもたってもいられず西を目指した。1997年夏。モンゴル国立大学の大学院で学んでいた時のことである。

首都ウランバートルからトラックの荷台に乗って草原のガタゴト道を揺られること3日間。ごつごつとした岩山の裾野にあるシルクロード風味の小さな町に着いた。古都ホブドである。住民も青い目をした者や茶色い髪の毛の者など、「西域」を感じさせる。その町の郊外にポツンと遊牧民の移動式住居ゲルが建っている。灰色のフェルトが野ざらしの粗末なゲル。それが件の呪術師の家だった。ゲルの奥には彫りが深くて眼光の鋭い男が座っていた。

「おまえは大学院で民族学を専攻しているのなら、俺に弟子入りせねばならない」。そう言われ、なんとなく弟子入りすることに。若いて怖い。教えられた呪文をひたすら繰り返し唱える「修行」を始めて3日たった。「あの〇〇の呪文を7回唱えよ」。師匠はそう言うと、おもむろにゲルの中央にあるストーブに長い鉄の棒をくべはじめた。「唱えたか?」「はい」「では、舌を出せ」。なんと師匠の手には、先端が真っ赤に焼けた鉄の棒が握られているではないか。ぎっと私を睨んで師匠は野太い声でこう言った。「おまえは、できる」



ホブド行きのトラックを背後に。右から二人目が筆者＝モンゴル国ホブド市で1997年7月、筆者提供

(2) 呪術師に弟子入り ㊦ 2021年1月16日刊行

なんと、私はモンゴルの辺境で呪術師に弟子入りし真っ赤に焼いた鉄の棒を舐めることになってしまった。師匠に「できる」と言われ、素直に舌をベロっと突き出した。赤く焼けた鉄の棒が眼前に迫ってくる。そして舌に触れた瞬間、「シュルシュルシュル」っといやな音。あれ？

意外と痛くない。呪文凄し！「今度は自分で棒を持ってやってみろ」。師匠に言われて、ペロリと一舐めしたが大丈夫だ。「よしおまえは習得した」。師匠は満足げにそう言った。

そもそもモンゴルの伝統医療では、病は「熱い病」「冷たい病」の2種類に分けられる。師匠いわく「冷たい病に対して熱い性質の呪文を唱えた上で真っ赤に焼いた鉄の棒を舐めることで呪文の力を鉄に移す。その鉄で患者をたたくことで病を癒すのだ」。だがウランバートルから電話が入り急遽戻ること。肝心の「どんな病気」に対してこの鉄の棒の治療が有効なのか、学ばずじまいに。私の呪術師修行はあっけなく3日間で終わってしまった。

日本に帰国後、呪文の力に頼らずとも焼いた鉄は少しの時間ならば舐められるということを知った。熱い鉄が舌に触れた瞬間、水蒸気の膜ができ、舌は1~2秒なら火傷しないらしい。それでもやはり呪文を唱えずに鉄を舐めるのは気が引ける。ゆめゆめマネなどなされぬように。



焼いた鉄を舐めるシャーマン=モンゴル国ドルノド県で2000年5月、筆者撮影

(3) わらう月夜の狼 2021年1月23日刊行

モンゴル人の「狼（おおかみ）観」はアンビバレントだ。崇敬すべき民族の始祖にして不倶戴天の敵。かの『元朝秘史』の冒頭は「上天より命ありて生まれたる蒼き狼ありき」で始まる。チンギス・ハーンの伝説上の始祖は「蒼き狼（正確には斑の狼）」だった。

現在でも狼に出会うことは吉兆だとされる。その一方で殺されなくてはならない。狼は遊牧民の大切な羊を襲う憎き敵だからだ。狼は羊の喉元の柔らかい部分しか食べない。1匹の狼によって一晩で何十頭の羊が食い散らかされることも稀ではない。

ある晩のこと。「チョノ（狼）！」ドライバーの男が叫んだ。我々は次の調査地へ向けて草原を移動中だった。「猟銃を出せ！お前が狙え！」ドライバーは後部座席の道案内の男に矢継ぎ早に指示を出す。「ズィヤー（おう！）」。その遊牧民の男は右ドアを開けるや身を乗り出して銃を構える。パーン。乾いた音が夜の静寂に響く。当たらない。狼は車が行きにくい林の方へと逃げていく。右へ左へ、ロシア製の四輪駆動車は飛び跳ねながら追いまわす。パーン。カチッ、パーン。

2時間に及んだ夜中の追跡戦の果て。狼は丘の上から林の中でエンストした我々の方を振り返った。なんと、口を開けてわらっているではないか。「狼に出会うと吉兆だが、仕留めれば男のスルド（運氣）はさらに上がる」。そんな彼らの世界観を覗けた月夜の晩だった。



草原の旅。ロシア製四輪駆動車は必須だった＝
モンゴル国ドルノド県ダシバルバル郡で 2000
年7月、筆者撮影

(4) 大シャーマンの最期 2021年1月30日刊行

モンゴルでシャーマニズムに少しでも興味のある者ならばツェレン・ザイランの名を知らぬ者はいないであろう。ドルノド県の草原で数多くの弟子を育てたブリヤート人の大シャーマンである。ザイランとはブリヤート人たちの間では最高位のシャーマンを指す。

巨大な体躯に鋭い眼光。初めて会ったとき、彼は70歳を過ぎていた。しかし巨大な体を揺らしながらシャーマン・ドラムを打ち鳴らし踊り跳ねる姿は圧倒的だった。海外の研究者たちの間でも有名で、招かれてヨーロッパ諸国やロシア、韓国など多くの国を訪ねた。

その彼が亡くなった。私が訃報に接したのは2006年春のこと。パリで学術会議に参加していた時、モンゴル人の学者から思いがけず伝えられた。実はその年の前の夏、私はモンゴルでザイランに会っている。3年ぶりの訪問にザイランはいつになく柔和な表情で出迎えてくれた。昔話に花を咲かせた後、「そろそろ帰ります。また来ますね」と別れを告げようとした私に彼は言った。「もうお前に会うことはないだろう。俺はこの冬を越すことはない。仏のところに行く。」驚いたが彼は真顔だった。

遊牧民が暮らすモンゴルの大草原は「無医村」だといってよい。その環境が人をして死期を悟らしめるのか。それともシャーマンだからか。いずれにせよ彼は言葉通りに逝ったのだった。



尼僧らと語らうツェレン・ザイラン（右）＝モンゴル国ドルノド県バヤンオール郡で2000年10月、筆者撮影